学 会 報 告

第７回国際農村医学会に参加して

厚生連高岡病院　林　　脩
上市厚生病院　越　山　健　二

第７回国際農村医学会が昨年９月17日から21日までの５日間、北米のソルト・レーク市で開かれ、富山県からは豊田会長（金沢大学長）、越山夫妻、林の４人が参加した。９月16日に成田を出発し、サンフランシスコで１泊、学会終了後は、グランドキャニオンやラスベガスの見物、ロサンゼルスの観光、サンディエゴの病院視察などを終えて、同27日に帰国した。この学会と旅行のあらましや印象を書いてみたい。

学会地までの道中

日本からの参加は76人で、うち20人近くはアメリカ東部やヨーロッパ巡りを兼ねる人達であり、また同伴組も多く、12組を数えた。

豊田会長は公用のために、また佐久の若月、船崎、それに通訳の労をとって下さる吉本の３氏は、学会運営打合わせのために、数日前に先発された。残りの吾々は、成田空港反対同盟の百日斗争が終わる日が９月17日とのことなので、混乱をさけるために、９月16日の集合はみんな箱崎と決められ、ここで結団式をあげた。全国厚生連の平塚、吉崎両氏に見送られ、物々しい警戒の中をくぐって、小雨がちの成田空港から17時のＪＡＬ62便でロスアンゼルスへ向って出発した。機内におさまると、さっそく英字新聞をひろげる人やら、英和小辞典をひっぱり出す人やらで、さすがに国際学会だなぁの感を深くする。

お互いにかねてからの顔なじみや耳なじみの人がかなりあり、また初対面の人でも、いずれも同じ組織の人達、あるいは同じ農村医学に志のある人達なので、最初からうちとけたなごやかな団体となり、添乗して案内して下さったトラベル日本の両氏も、こんなにまとまりのある楽な団体は滅多にない、と解散の時に話しておられたほどである。

飛行時間は９時間30分の予定だが、時差の関係で、現地に着けば時計を16時間戻さねばならず、機内でよく眠っておかないと時差ぼけになって、あとあとの体調が狂って困ると聞いて、努力したためか、湯茶の接待は全く気付かずに過ごしてしまった。現地の９時頃（夏時間）の機内放送によると、当機の左側 100 kmの所を台風19号が通過中とのことで、さすがのジャンボ機もすこしゆれる。

ロスで乗りかえ、１時間でサンフランシスコに着き、「漁夫の波止場」にある往年の名選手ディマジオ氏の経営する魚貝類専門料理店でおそい中食をとり、バスデ金門橋や金門公園などを見物する。

ホテルはヒルトンだったが、部屋割りを待つ間にも、次々と日本人の団体が乗りこんできた。おばさん達ばかりの団体もあって、これもやはり円高の影響もあるのであろうか。

聞くところによると、アメリカでは車検制度がないのだそうである。日本の車検制度を採用したらという意見が出て、委員会を作ってくわしく検討したが、やはり今のままがよいという結論になったのだそうである。車検がなくても、事故をおこす度に罰金がぐんと高くなり、保険金も大幅にふえるので、また

一方公共の交通機関があまりないアメリカでは、自動車がないと生活できないほどなので、両々相まって、事故など起こしてはおられず、ましてや暴走族など起こりようがないのだそうである。

大通り以外の一人や二人歩きは男でもあぶない、ホテルでも、盗られても殺されてもホテルは責任を負わないのだと、すこぶる物騒な話を聞かされていたが、部屋の内鍵が３重になっているのを見ると、なるほどなぁと身にしみる思いである。３人で夜食を外でとり、高層ビルの肩にかかる名月を眺めながら、ホテルまで歩いて帰った。

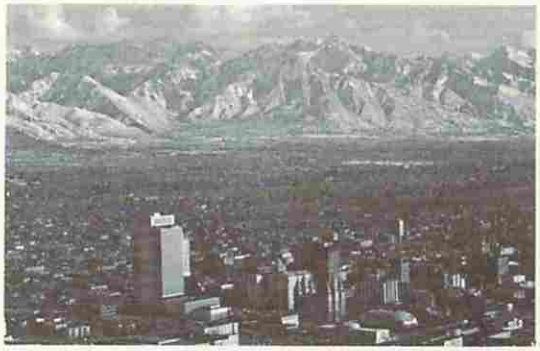
ケーブルカーを待つ人達

一夜明けても、ようやくまだの17日の日曜日、大きな店はみな休み。名物のケーブルカーに乗ろうとしたが、来るのも来るのもみんな満員。始発点へ行って見ると、延々と長蛇の列、とてもこれでは集合時間までに帰れそうにもなく、写真に撮るだけであきらめる。

学会地　ソルト・レーク・シティ（ＳＬＣ）

17日ひるすぎ、ウエスタン航空 344便で、学会地のソルト・レーク・シティ（ＳＬＣ）へ。途中リーノでかなりの時間着陸待ちをし、いよいよＳＬＣへ近ずく頃から空が暗くなりだし、やがて稲妻を伴なう雨となり、大型機なのだがかなり揺れて、飲み物サービスが前列までで中止となり、あれっと思う中にもう雨の空港に着陸してしまった。

今度の旅行先きは殆んど雨が降らぬから、雨具の用意は要らぬとのことで、身軽でやってきたが、大して濡れもせずに、バスで学会場のヒルトンホテルへ。夜が明けてみて驚いたことには、遠くの山々が真白く朝日に輝いて、すっかり雪化粧。明け方早くでは庭先の車の屋根に少しばかり積もっていたとか。



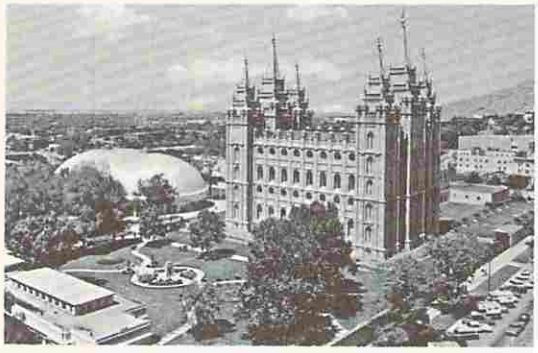
ソルト・レーク市

外へ出てみるとひんやりと肌寒い。数日前まではかなりの暑さ続きだったので、まさに異常気象だとの話であった。天候は次第に恢復し、午後からはずっと好天続きとなった。

このＳＬＣは、ユタ州の州都としてよりも大塩湖の近くで、モルモン教の総本山のあることで有名で、早くから松本市と姉妹関係を結んでいる。ユタ州はロッキー山脈の中にあるので、州の大部分が砂漠あるいは半砂漠の状態で、太平洋からの西風はシェラ・ネバダ山脈に遮られて入ってこないために、雨はごく少ない。しかし山地には降雪があって、これが農業用水に利用される。従って農地や牧場は少なく、鉱業が最も重要な産業となっている。

ＳＬＣの人口は20万位。北緯約40度（秋田県の八郎潟あたり）、東には巨大な山脈が南北に走り、西には広漠とした砂漠が横たわり、西北には対岸が見えないほど大きな（ビワ湖の７倍）塩分の濃い（20～27％）大塩湖（グレート・ソルト・レーク）があって、標高は1300ｍ。冬の寒さも夏の暑さも共にきびしい大盆地である。ここにモルモン教の大本山、州庁、州立ユタ大学などがあるが、他宗派の教会も多くある。

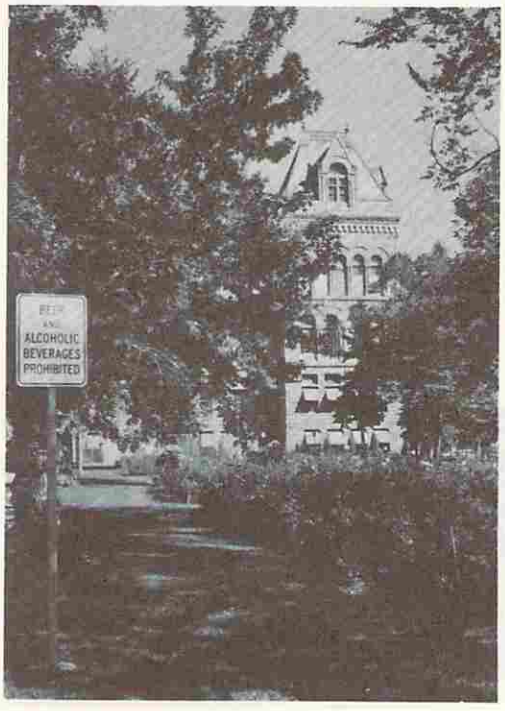
モルモン教はアメリカにおけるキリスト教



モルモン教大本山

の一宗派で、1830年にニューヨーク州で組織されたが、やがて迫害され、ブリガム・ヤングが指導者となって 147名の信従を率い、東部から追われてこの地区へ移住し、その宗教的情熱をもって荒野の開拓に従事し、1847年にコロニーを作ったのが発展して、現在のＳＬＣとなったのである。

モルモン教徒は、州の総人口の約60%を占めている。教徒は収入の10%を教会に献金する義務があり、教会はそれで色んな事業を行ない、また学校や公衆衛生施設の整備にも努



酒のみ は 入るべからず

力し、この点は全米第一で、高校の就学率は96%に達しているそうである。

大阪での万博にもモルモン教の独立した小さなパビリオンがあたったのを記憶している方もあろうかと思う。その時のパンフレットによると、日本にも約12,000人の信徒を数えるそうである。

ＳＬＣでは、ホテルで酒をのむのはよいが、町の中ではのめず、ほろ酔い気嫌で町を歩くと白い目で見られますぞと注意されて来たが、事実、教会の敷地に入ると、「ビールとアルコールをのんだ者は入るべからず」の立て札が目についた。ホテルのフロントには、「ユタ州で酒をのむための支障のない６つの手順」という刷り物がおいてあった。

この町が学会場として選ばれたのは、単なる観光地としてではなくて、どうもこの不屈の開拓魂を紹介しようとしたためらしい。医学会ばかりでなく、他の学会もこの町で度々開かれているのだそうである。

学会のあらまし

国際農村医学会は、1961年に国際産業医学会から独立して組織され、農民の職業上の健康疾病を扱う農業医学会として発足して、第１回はフランスで開かれた。日本が積極的に参加したのは、第３回からで、第４回は日本で開かれている。

若月先生はかねてアジア的立場から、「農村衛生」の重要性を主張し続けてきたが、第５回の理事会でついにそれが多数決で認められ、従来のＩＡＡＭ(International Association of Agricultural Medicine) という名前が、ＩＡＡＭＲＨ(International Association of Agricultural Medicine and Rural Health) に変更された。

今までの学会をまとめてみると、次の表のようになる。

さて、９月17日の夕方、学会場のヒルトンホテルへ着いて、先着の豊田会長や若月、船

回数	開催年(昭和)	開　催　地	学　会　長	参加国(人数)	日本人(演題)
1	1961 (36)	フランス（ツール）	ワッシェ教授	16 (120)	1 (1)
2	1964 (39)	西独(バードクロイツナハ)	ブロイシェン教授	16 (150)	11 (2)
3	1966 (41)	チェコ（プラチスラバ）	マツッフ教授	24 (450)	42 (10)
4	1969 (44)	日本（臼田町、佐久）	若月博士	25 (496)	417 (66)
5	1972 (47)	ブルガリア（バルナ）	カライジェーフ教授	36 (653)	43 (23)
6	1975 (50)	英国（ケンブリッジ）	エリオット博士	33 (250)	38 (12)
7	1978 (53)	米国(ソルト・レーク・シティ)	ナップ教授	18 (130)	76 (33)

崎両先生達に迎えられ、無事安着の挨拶をしている所へ、チェコのマツッフ博士がのこっと現われた。出発前に、「今度の学会には大農業国の中国もソ連も参加せず、それに伴なって東欧の諸国も不参加、常連のマツッフ博士からもいまだに連絡がない、学問には政治もイデオロギーも関係がなく、吾々の学会が全くの民間の組織であるのにもかかわらず、ほんとに困ったことだ」と若月先生が嘆き、また「今度の学会長のナップ教授はアメリカのアイオワ大学の農業医学実験所の人で、産業医学系の人ではあるが、医学者ではなく、今後国際学会の性格が、また元の農業医学に片よって行って、日本流の農村医学がうとんぜられるのではなかろうか」と心配しておられたのだが、マツッフ博士のこの突然の出現に、まずはひと安心という態であった。参加各国の国旗で飾られたロビィで、早速登録を済ませる。

翌18日の午前は開会式で、会長や来賓の挨拶のあとで、3人の総会報告演説があり、午後から一般演説が1人15分で3会場に分かれて始まった。参加者は、初日の発表によると18カ国 130人で、アジアからは同伴者を含めて日本人76人、韓国3人、インド2人、パキスタン（紙上）1人であった。

抄録集があるものとばかり思っていたのだが、公のものも個人のものもなくて、和封筒位の大きさのプログラムに、演題と演者と会場が日程の順に7頁ほどに並べてあるだけのもので、演者には国名も入っておらず、全くもって簡単もここに極わまったというような

学　会　場

始末、3会場の1つででも、やれたら同時通訳をやりたいとのことであったが、用意がなくてこれもだめ。いきなり耳だけのぶっつけ本番という次第で、残念ながら演説の詳しい内容については、いずれ出版される会報にゆずらざるを得ない。

演題は77題で、テーマ別に整理すると次の表のようになり、そのうち日本からのは33題で半数近くを占め、どの会場でも、そしてどのテーマにも日本人が出題していない所がないほどの大活躍であった。

質　疑　応　答

テーマ		演題(日本)
農村地域の青年と中毒学(小児と農薬)		6 (3)
人間工学	事故と振動	5 (1)
	労働衛生	12 (5)
生活と労働状況	人畜共通の伝染病	7 (5)
	各種の病気	7 (4)
社会衛生と健康	健康管理と老化	10 (3)
栄養と青年	農村の婦人と小児	6 (4)
中毒学	農薬中毒	15 (7)
討論会	農村の健康管理	3 (0)
	農村地域の	6 (1)
	プライマリーケア	77 (33)

映画も、次のものが一般演説と並行して紹介された。

農村保健教育プログラム

ニューホリゾンズ（新しい視野から）

トラクターの安全性

安息な生活のために（無水アンモニア事故）殺虫剤の内側と外側から　（以上全部アメリカ）佐久総合病院の歴史など。

会場は、大広間の他はどれも学校の教室位の広さで、特別な飾りは少しもなく、座長もしごくくつろいだ姿勢で、質問や討論も至ってなごやかに行われていた。学会では演者に対して、何らかの発言をするのがエチケットだとの噂の通り、少人数ながら熱心な問答がくり返されたが、会話に自信のある日本人はごく少なく、そしてどの会場にもベテランの通訳者がいる訳にもゆかぬので、質問が出ると、会話のできる人が助け舟を出すという場面が多く見られ、全くほほえましい情景であった。

国際農村医学会の方向

国際農村医学会の方向がまだ固定していないのだはないか。先進国では農村医学の部門が大学の中にあり、研究所も併設された処が多く、人口稀薄な地帯の医療を考えるセクションもあるようである。この部門で人間と工学、農業と機械、人畜共通の寄生虫や中毒、母子の保健や医療問題が研究されてはいるが、日本の農村医学が取り組んでいるような形とは相当の開きがあり、国際的にもはっきりとした目標が確立されていないようである。日本では農民、農家、農村を基盤とした生命と健康破たんに対しての実学であり、農家の作業形態、生活様式などから発生する精神的、肉体的、且つ環境の中で把握される保健問題全般と取り組むことを志向したものだが、これとはかなりの距離がある。しかし今回までに日本が果たしてきた業績内容から、日本農村医学会の基本的な概念が国際的にも認められ、それが中核になるような雰囲気にあり、その組織や役員も日本によって進めようという各国の気分があることは、今回の学会の大きな成果であったと思われた。

学会中の行事

9月18日の晩は、会長歓迎会が大広間で催

グレート・ソルト・レーク

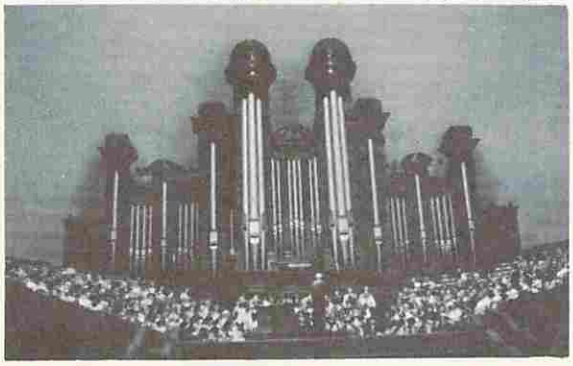
され、19日の午後には市内見学が計画された。まず市の名の元になったグレート・ソルト・レークへ行き、説明を聞きながらその塩っぽ

"THis IS tHe PLace"

さを舌で確かめた。次に開拓者記念州立公園へ案内された、東部の社会で迫害されたモルモン教徒達が、安住の地を求めて未開拓の荒野へ足かけ3年の苦しい旅を続け、1847年7月にようやくこの地方へさしかかり、指導者ブリガム・ヤングが「これこそ、われらが土地だ」と叫んだ丘で、壁画や記念碑について詳しい説明があった。ユタ大学の広大な敷地を通り抜けて、モルモン関係の建物や州庁を見学し、最後にモルモン教の大本山へ案内された。

20日の夕方には、Lagoon（塩水湖）という名の開拓村を訪れた。開拓初期の建物などを集めて、当時の諸道具や風俗を展示した、わが国の明治村のような施設を見学しながら、バイソン・バーベキューで夕食をとった。

最終の21日の午後は、総会と閉会式、夕方からホテルの中庭でさよならバーベキュー。終って7時半からモルモン教の大本山で、モルモンタバナクル聖歌隊のリハーサルを見学した。吾々の他にもいくつかの団体が定刻にそれぞれ入場していた。ここのオルガンは、11,000ものパイプから構成された世界一の壮大なもので、その前で熱心な練習が行われていたが、その合間に指揮者が農村医学会その他の皆さんのためにと挨拶して、Happy Birthday の合唱を聞かせて下さった。



聖歌隊のリハーサル

以上のように、見学や宴会で、会長や学会長が夫人と一緒に、ＨＯＳＴと大きな金文字で書いた札を名札の下につけて、会員の間を立ち廻り、大いに歓待して下さったのであった。ご主人は別としても、奥様方がなかなかの接待ぶりで、とても好きばかりではやれぬだろうと、連日のお骨折りに感謝の挨拶をしたら、学会長夫人が涙を流して喜ばれたので、「あぁやはり大変に努力してつとめておられたのだなぁ、涙はその努力を分かってくれて嬉しいという気持ちの現われであったろうと思った」と、牛島夫人が帰り路でしみじみともらしておられた。

２人ともＨＯＳＴ

それにしても、抄録にももう少し配慮がほしかったとの思いはやはり残るし、また夫人のも胸の札はＨＯＳＴで、ご主人のと全く同じものであり、プログラムの座長の表示もChairman とか Chairwoman の区別はなく、男性も女性も一様にChairpersonとなっていたのは、単に事務能率の上のことではなくて、ウーマン・リブの影響なのであろうか。またヨーロッパでは、どうなのだろうか。

慣れない英語

第4回の学会が日本で開かれた時は、英語、ロシア語、日本語の3カ国語が公用語として選ばれ、それぞれの言葉の抄録集が早くから準備され、メインホールでは同時通訳を用意し、他の2ホールには補助通訳者まで配置して、至れり尽せりの大サービスであった。

ところが、今度の学会では、仏、英、独の3ヵ国語が公用語であったが、抄録集は全くな

く、同時通訳もなく、仏人も独人も、その他の国々の人達も、すべて英語いってんばりであった。

130人の参加者の中、日本人は76人で、米英両国人を合わせたよりもずっと多く、演題でも77題中33題で、半分近くを占めたのだが、日本語が通用せぬのは、外国では止むを得ぬことなのかも知れない。それにしても吾々日本人は、ゆっくり時間をかけて用意した演説は何とかこなせても、外国語で当意即妙に質問や討論のやりとりを出来る人は、やはり限られたごく少数の人々だけのようである。

18日の晩に、ホテルの一室で、日本人だけが夕食を共にし、役員の理事会報告や、改めての自己紹介やらで、大変 at home なひと時を過ごした。その時の主な話題は、期せずして英語での苦労話に花が咲いたのであった。

「英語だけの学会には、全く苦労した。子供や孫にはぜひとも英会話が出来るようにしてやりたい」としんみりとする人もあれば、また某教授は、「中学生になって英語を習いだしたが、どうにも好きになれず、そこへもってきて、鬼畜米英をやっつけたら、世界中が日本語になるのだと聞かされて、それをよいことにして適当にさぼっていたら、今はその報いで、英語には散々苦労させられている」と打ち明けられた。それを受けて、朝日イブニングニュースの編集局長の吉本氏は、この教授と中学同級生なのだが、「学校で習った通りにやろうと思うから、むずかしい。同じ英語でも、国により、地方により、また個人個人でみんな違っているのが実情だから、物おじせずに堂々とやればよい」といとも簡単なような話をされる。

信州大学の加藤学長(眼科学教授)は、よほど以前に眼科の専門雑誌にエスペラントの連続講座を書かれたほどの大家だが、「学会用語としてエスペラントの採用の件について、今度はよほど出題しようかと思ったが、実は思いとどまった。エスペラントだと、英語の勉強の1/20の努力でマスターできるのになぁ」と慨嘆される。

また某氏は、「日本人は学問はよく出来るのに、会話が下手くそなのは不思議でならないと外人に言われると、自分は何時も次のように説明している。日本人は英語は第4国語として勉強しているのだ。第1はカタカナ、第2はひらがな、第3は漢字、そして英語は第4になるものだから、あまり上手ではないのだ」と一同を笑わせて、会話の件はこれで一応おさまったような次第であった。

病院見学

かねてから申しこんであった病院見学については、アメリカ側から大小2病院を推選されたが、大きな病院の方は、学会と期日が重なるので間に合わず、学会が終わってから、25日にサンディエゴ市にある小さな病院を見学することになった。

同病院は Kaiser Foundation という財団の出資による病院で、Kaiser Permanente Medical Offices という研究所と、これと少し離れた所にある病院とからできていて、向うの都合で3班に分かれて見学を許された。

カイザー医学研究所

同日朝、すぐ近くのサンディエゴ空港付近でおきた航空機の空中衝突の大事故で、医師達が救護に出向いているために、かなり待たされてしまったのは、お互いに不幸なことであった。

1班は健診部門を見学した。看護婦、保健婦、検査技師達だけの12人のチームで、毎日150人のスクリーニングを全部やり、医師はその結果を判断して被検者に説明するのだそうで、約1割の人々が要再検者であるとか。

2班は、前記の検査に必要な最新鋭の設備を見せてもらった。

3班は病院の見学で、病床は 202、契約中の医師は 100人。外科などでも、できるだけ外来で済ませ、入院を避ける方針なので、大変評判がよくて利用者がなかなか多い由。ＣＣＵやＩＣＵの病棟もあったが、そこでも13号室は抜けてはいなかった。カリフォルニア州には同系の病院が7つもあり、薬品などすべて共同購入している。

ナ　ー　ス　室

4人家族で1年に1000ドルを保険料として同財団に払えば、あとは検診から外来、入院などすべて面倒をみてもらえるのだそうで、人口 100万のところ20万人が登録しており、この5％の人が同施設を利用し、その中の26％が治療を受けているそうである。早く見つけて早く治せば、患者も財団も両方とも助かるという仕掛けになっているようである。

医療費が高くなるばかりなので、これをいかに安くあげるかが大問題で、国をあげての研究最中であり、その一つのモデルとして、この施設を紹介されたらしい。

帰　り　路

22日午前、ウエスタン航空で約1時間飛んでラスベガスへ着き、ここでプロペラ機に乗りかえてグランド・キャニオンを空から展望、その後はバスで観光してラスベガス泊り。

ロスアンゼルスでは、市内、ハリウッド、農民マーケット、ディズニーランドを見物し、

ディズニィ・ランドの救護班

サンディエゴでは病院（前記）と市内を見学した。

ロスには、井波出身の笹島さんが花の栽培で成功しておいでになり、砺波のチューリップはもとより、日本の各界の人達が随分お世話になっていることは知ってはいたが、まさか会えるものとは夢にも思っていなかった。ところが、一行中の松本の藤本氏がかねて笹島さんと交際があり、同じ富山県の吾々を紹介してやろうと言って下さり、夕方笹島さんご自身運転の車でお迎えをうけ、同氏のお宅へお招きにあずかったのであった。(豊田学長は公用で一足先きに帰国)。ロス生まれの越山は父親のことをたずね、また林の母方の祖父を笹島さんが覚えておいでになり、今夜はまことに不思議な因縁の者共が図らずも寄り集まったものだと話が色々とはずみ、夕食をよばれて、またホテルまでご自分で送って下さった。81才とはとても思われぬ元気さで、まことに頼もしく、恐縮しながらも嬉しい思い出であった。

そして、いよいよ26日、日航61便で、夏が

笹島さん(左から2人目)を囲んで

再びぶり返して連日41℃前後の猛暑（俗にインディアンの夏というそうである）の続いているロスから、偏西風にさからって、帰りは約11時間をひととびに、27日午後成田に安着した。一部はここで、大部分は箱崎で、全厚連の吉崎氏の出迎えをうけ、来月はまた新潟で会いましょうとの挨拶で、めでたく解散したのであった。

後記：次の第8回は、1981年（昭和56年）にフランスで、第3回アジア学会はその前の年にインドで開かれる予定である。
またヨーロッパ部会の設立が確定し、ラテンアメリカ部会も近いうちに作られることに決定した。